

# 絶対に負けられない“試験”が、そこにはある

— 技術士（建設部門：道路） —

### 1. はじめに～受験の動機、経緯～

新潟県庁に入庁し、日々業務に追われる中で、「より一層主体的な業務運営や適切な判断をできるようになりたい!」と思い、この試験に臨むことにしました。

また併せて、私の所属する組織内には、「みず・遊び・かい」なる職員の技術力向上を目的に技術士資格の取得等を支援してくれる団体があり、その存在が、私自身にとって合格以外の退路を断つきっかけをくれたように思います。

### 2. 試験に向けた準備

受験の準備をするにあたって、まず私のやらなければいけなかったことが、「継続的な学習時間の確保」でした。平日は仕事、休日は家庭サービスや趣味等がある中で、私が選択した時間帯は、「朝」でした。

早朝の場合、自分の意志さえ貫ければ、1人だけの静かな環境の中で、集中して試験の準備に必要な「情報の整理」や「答案文作成」を行うことができました。

### 3. 準備の要点

技術士2次試験は、筆記試験（7月中旬）と、口頭試験（11月下旬～1月中旬）の2つの試験があり、私の場合、各々の試験で以下の項目を重点的に取り組みました。

#### 1) 筆記試験対策

- ①国土交通省HPの「審議会・委員会」の配布資料の確認、整理
- ②施策別に想定試験問題を設定し、その答案文の作成、添削
- ③過去試験問題の答案文の作成、添削

#### 2) 口頭試験対策

- ①受験時に提出している「業務経歴票（経歴・業務内容の詳細）」の説明
- ②想定Q&A（業務内容、技術士倫理）の作成、添削、暗記、発声
- ③模擬面接

### 4. 筆記試験対策（答案文作成）の要点

答案文の作成に「骨子表」を活用することで、容易に論理的な構成とすることが可能になります。「骨子表」とは、文章を作成するにあたり、矛盾や過不足を取り除く、答案文の設計図のようなものです。

例えば、「問題解決能力及び課題遂行能力に関するもの」を問う場合、出題される問題文を踏まえ、骨子表を下記の構成で作成します。

- 〈 1 〉 背景
- 〈 2 〉 現状、問題点
- 〈 3 〉 課題
- 〈 4 〉 解決策
- 〈 5 〉 留意点

この5項目の中に、記載すべき内容を落とし込み、

文章の論理展開の整合性や矛盾の有無等を答案文の作成前に一度確認することで、論点が明確となった答案文になります。

## 5. 口頭試験対策（想定Q&A）の要点

業務経歴表（経歴・業務内容の詳細）に記載した内容について、あらゆる角度から試験官の立場を想定して質問を作成し、その質問に対する回答を準備します。

また、技術士制度についても「3つの義務、2つの責務」の他、技術士の役割・位置づけ等を含め学習し、具体的な事例を踏まえながら、実際に想定Q&Aを作成します。

最終的に、作成準備した想定Q&Aを含め、頭の中だけでなく実際に発声できるかを確認するため、模擬面接等を本番試験前に身近な方の協力を得て、経験しておくことをお勧めします。

## 6. 先輩技術士からのアドバイス

試験に臨むにあたり、2つの試験項目の各々で、上述した「みず・遊び・かい」の先輩技術士の方々から以下項目を中心に、多くの助言や添削を実際に行っていただきました。ここでのアドバイスが、試験本番に落ち着いて臨むことを手助けしてくれました。

### 1) 筆記試験

- ①出題者が何を聞き出したいのかを問題文から適切に読みとること
- ②「多面的に」という場合、最低でも3つ以上の項目出しをすること
- ③話題のキーワードや数字・動向等を把握した上で、答案文を作成すること

### 2) 口頭試験

- ①業務経歴票（経歴・業務内容の詳細）の説明を複数の時間パターン別に用意



新潟県 交通政策局 港湾整備課  
建設防災係 主任

しげずみ もとい  
**重住 基**

（取得した資格：技術士（建設部門：道路）  
資格取得年度：平成29年度）

- ②試験官が理解しやすく、具体例を交えた回答を準備しておくこと
- ③業務内容の中で、自分の役割が技術士にふさわしい点を明確にすること

## 7. おわりに

### ～資格取得に向けた過程で得たもの～

日々の業務運営をする上で、関係者等と円滑に調整を図ることは必要不可欠な要素です。今回、この試験対策に取り組む過程で、資格の取得とは別に、自らが得られたこととして、下記が挙げられます。

- ①相手の立場で、「何が問題で」「何が課題なのか」の判断
- ②相手にとってわかりやすい提案とするための工夫とその重要性の再認識
- ③最後まであきらめない精神

資格を取得して約2年が経過しますが、今回の記事投稿の他、組織内外で学習方法等を含めた体験談の講師等も経験させていただきました。その中で自分自身の「気づき」や「改善すべき点」等を踏まえ、今後も、私自身の自己研鑽に努めていきたいと思えます。